

## 社会科学の論争における非合理的要素について

阿 部 秀 夫

科学的論争は他の一般論争、議論とは異なる。その差異を求めれば、種々様々なことを指摘し得るであろう。その一つは、科学的論争の際は、論者も傍聴者も、ともに「合理性」<sup>(1)</sup>を期待しているということである。その発言は理性的、その論旨は論理的、その資料は「事実」についての知識で検証可能なことであると考えている。かくて、そこに絶対的真理の誕生が待望される。

ところが、論者の細心の注意、傍聴者の期待にもかかわらず、実際には、検証不可能な形而上学的要素、真偽を問うことの出来ない情緒的、力動的表現<sup>(2)</sup>、論理的誤謬、「あいまいさ」などが、いつも多量に論争に混入しているように見受けられる。

周知の如く、フランシス・ベーコンがノブム、オルガニム・シエンテアルム<sup>(3)</sup>を著わし、四つの偶像につき警告を発したのは一六二〇年、今から、ほぼ三五〇年の昔である。だが、かれのことばは、今日なお新鮮な意義をもつ。というのは、論者が躍起となつて、これ等の偶像を論争から追い出しても、いつの間にか偶像は再びもどり来り、論争に

まぎれこんでいるからである。一体、これら論理では割り切れぬ非合理的要素を論争から完全に閉出す可能性はあるのだろうか。玉ネギをむくように、これらの要素を一つ一つ除去したらば、最後には何も残らなくなってしまうのではあるまいか。

もし非合理的要素を完全に追出すことができず、それが論争内に、何としても残存するならば、牽強付合な論理をもてあそび、それがあたかも合理的要素であるかの如く取扱うよりか、非合理的要素は非合理的要素と、はっきりと認めて処置した方が、論旨はすっきりとする。こうすることにより、爾余の合理的要素が純粹性を保ち得、論争の大纲が合理的なものとなり得る。社会科学上の論争が、とかく水かけ論におわり、あと味の悪い実り少ないものとなる一つの原因は、このことを考えないからであらう。

では、非合理的要素は、思惟、前提、定義、用語、表現のなかで、どこに、どのような形で存在しているか。この問題については、ベーコン以来、プラグマティズムのウィリアムジェームス、バース、分析哲学のヴィットゲンシュタイン、ライヘンバッハ、ポPPER、エイヤーなど一連の科学哲学者が詳細に論じている。<sup>(四)</sup>しかし、これらの多くはあまりに詳細、煩瑣であり、哲学以外の分野で使用するには、いささか不便な感がある。素樸な目に映じたまま事態を認識することにより、もっと簡単な効用性ある見方はできないであらうか。

註一 「合理性」という言葉は、学的論文においてすら、きわめて「あいまい」である。哲学用語としては普通、「知識の源

泉は理性である」との見解が合理主義とよばれる。ところが、rationalとrationalisticとは異った意味で用いられている。前者は「理性による自然観察」、後者は「理性による知識綜合」を指す。だが、このような慣用的区別は、ここでは必要はない。「理性により、割り切れるか否か」、「割り切れるも」のを合理的と言つてよい。

Hans Reichenbach : The Rise of Scientific Philosophy 1959, 31p.

註一 力動的とは dynamic の訳「密を開ける」といった他人の態度を変えさせようとする、すなわち命令的表現。おおよそ、陳述にせよ「敘述的」(descriptive statement)「力動的」(dynamic statement)「情緒的」(emotional statement)の三種が考へられる。「敘述的表現」には、真偽を問ふことなきが、後の二者に真偽を問ふことばびきならぬ。もちろん、論者のなかには、後の二者に別個の真理を想定する人もいる。これはことを紛糾させるだけである。

オクデン、リチャーズ共著「石橋幸太郎訳」「意味の意味」288p 参照

註三 Francis Bacon ; Novum Organum Scientiarum, 1620 Par. 38—44

註四 William James ; The Meaning of Truth, 1909.

Charles S. Peirce ; The Fixation of Belief ; how to make our Idea clear. 1877.

Ludwig Wittgenstein ; Tractatus-Logico Philosophicus, 1922.

Hans Reichenbach : The Rise of Scientific Philosophy, 1951

Karl Raimund Popper ; Logik der Forschung, Wien. 1959

A. J. Ayer ; 吉田夏彦訳 言語、真理、論理, 1959

L. Stevenson 阿部秀夫訳、倫理的名辞の情緒的意味、(現代英米の倫理学 691—721pp. 福村書店 1959)

○

まず、論者が提出する科学的陳述について考えてみよう。これは合理的判断をなす重要な資料となる。信頼度は極めて高い。ところで、科学的陳述は普通、帰納法によってつくられる。衆知の如く、帰納法とは、いくつかの特殊事例から出発して普遍法則を発見する方法である。すなわち、既知の部分的知識で未知の全体を断ずることである。「群盲、象をなでる」という結果にならないとも限らない。スチュアート・チェーズ [Stuart Chase : Guides to

社会科学の論争における非合理的要素について

Straight Thinking 1956 (Harper)の用例をかりれば、「フィラデルフィアからボストンまで並木があるから、ボストンから北極までも並木は続いている」といった論法である。これは「概括化の誤謬」(Fallacy of Generalization)である。帰納法は、その本質においてかかる誤謬を含む。それにもかかわらず、帰納法が誤謬を犯していると非難されないのは、あらゆる場合において「同一条件のもとでは、同一のことが起る」という前提が認められているからである。この命題は、明らかに未知の世界についての命題である。だから実証されるわけがない。経験的でなく超経験的な命題である。帰納法も、その根底にかかる非経験的な命題をもって、はじめて可能となる。

次に実証されたことを、なぜ、われわれは信じなければならぬか。「実証されること」と「それを信ずること」とは別個の問題である。「実証されたことを信ぜよ」という命題があつてはじめて両者は結合する。この命題が先天的命題であるとしたならば、それは経験的でない。単なる形而上学的なものとしたら合理的ではない。いずれにしろ科学的命題ではない。もし、この命題を科学から引出すことができると考えたら、「である」から「べし」を引出した(1)ことになり、ムーア教授のいう「自然主義的誤謬」(naturalist fallacy: Edward Moore Principia Ethica)をおかすことになってしまう。

さらに科学が演繹法によるとしたら、最初の命題は、やはり科学から引出すわけにゆかない。科学的判断は、すべてこのように、非科学的前提に立脚している。

そこで、非科学的前提に立つという、単にそれだけの理由で、論敵の学説を非難すること自体、自家攪着不合理だということになる。

また、科学的判断は前提をもつ判断、すなわち仮言的判断であるから、これを絶対視してはならないということにもなる。もし絶対視すれば、われわれは一時代、一社会の知識に固着してしまい、その結果、科学の発展を否定することになってしまう。

この点、エイヤー教授のことばは極めて印象的である。「われわれが現代の科学の方法を信用するのは、それが実際ににおいて成功をおさめたからである。もし未来においてわれわれが異った方法を採用するようになるならば、その時には現在合理的である信念は、この新しい方法の見地から非合理的なものとなるかもしれない」とかれは言う。

註一 フランケン著阿部秀夫訳、「自然主義的あやまり」福村書店、現代英米倫理学第二巻、1959。

註二 A・J・エイヤー著、吉田夏彦訳「言語、真理、論理」、118p、1955 岩波現代叢書

以上は科学一般、特に自然科学についての問題である。だが、今日、社会科学は自然科学的方法を多分に用いているから、以上のことは社会科学を論ずる際にも重要である。しかし、社会科学の分野では、ことはさらに複雑になる。

○

およそ、社会科学、自然科学といった問題については、学者はそれぞれ異なった見解を持し、その分類、定義、解釈もまたまちまちである。したがって、これは極めて煩瑣な問題となる。だが大ざっぱに言って、社会科学の分野では、自然的現実だけでなく歴史的現実が対象となる。この歴史的現実たるや、内的体験、すなわち反省によって与えられるものであるという（ディルタイ）。内的体験は、たとえばそれが合理的体系の如く言われたとしても、それは形式上の観察に過ぎず、内容は、実際には、合理的ではあるまい。というのは、この場合、いかに理性的反省をしよう

と心がけても、知らず知らずのうちに個人の感情、世界観、価値観が作用するからである。一頭の馬を、馬車屋は牽引力、肉屋は、これを肉塊と見るに至る。概念 (Konzept) の意) は人によっていささか異なるのではあるまいか。この差異は、一部分析哲学者のいうように言語分析だけの問題だとは言いい切れまい。

もともと論争は、(A)意見の不一致と(B)相手の態度を変えさせようとすることによって起る。この二つのうち、いずれが欠けても論争は起らない。意見の不一致は分析すれば、スティブソンも指摘する如く、(1)「確信の不一致」と(2)「態度の不一致」となる。

「確信の不一致」とは事実に関する不一致である。自然科学における意見の不一致はその典型的なものである。この分野では確信の不一致が解消すれば、意見の不一致は解消する。「水素と酸素と化合させれば水になる」という論争は、これを実験してみれば解消する。社会科学の分野でも、これと同様な場合はいくらかでもあろう。たとえば「ソヴィエトは独裁国でない」ということについての論争は、ソヴィエト憲法第三条「ソヴィエトは労働者、農民の独裁の国家である」を示すことにより、一応解決する。甲がロシア語ディクトウラを日本語の独裁と訳すのは適当でないといえ、乙は辞書を見ればよい。これ等は、みな事実についての論争であり、検証することのできる対象を取扱ったものである。心配なく、合理的論争ができるのは、実に、この範囲である。すなわち資料調整の一部にとどまる。だが事実の観察となると事情は異なる。たとえば甲が「日本人は勤勉である」と言い、乙は「勤勉でない」と主張したとする。両者は、自分に有利な実例を次から次へとあげるだろう。おそらく両者とも、このような実例を無数にあげることができる。このような論法は科学論文においてもしばしば見受けられる。この論法は、実は、論点先取

(Assumptia non probata)なる誤謬をおかしているのである。だがこのような論争の場で「文化のパーソナリティ」を問題とする最近の社会学(クルックホーン、エリック、ベネディクト、ミードなど)<sup>(二)</sup>が繁栄している。

ところで、この分野においても、実は検証できない陳述があることは、注意を要する。例えば、「一九三九年にイギリスは宣戦を布告した」という文章<sup>(三)</sup>を考えてみよう。「イギリス」は感覚によっては知覚できない。したがって、この文章は検証することはできない。といって、この文章は充分報知的役割をはたしている、認識的意味をもたないとは言い切れない。だが科学(特に論理実証主義の立場)から見れば非合理となる。

註一 ダビッド・リースマン著加藤秀俊訳「孤独な群衆」訳者あとがき参照

註二 これは論理実証主義を批判するとき、いつも用いられる用例。「イギリス」とは個々のイギリス人A・B・C……Nまで、その総体を意味するとしたら實際上A・B・C……nのすべての英国人が宣戦したとは誤であろう。宣戦が布告されるまで、多くのイギリス人はそのことに周知しなかったに違いない。もちろん宣戦に反対した人も居たであろう。それは「イギリスの外務大臣が宣戦のメッセージを発表した」と言いかえてみたかどうか。このような言いかえは明かに不可能である。なぜならば、外務大臣が病気で誰れか他の者がメッセージを発表したとしても、イギリスが宣戦を布告したという事実には変りはない。そうしてみると、外務大臣が宣戦の布告をしたかどうかというような感覚的知覚によって検証されうる事実には、「イギリスが宣戦を布告した」という命題の意味を理解するためには、不必要であると言わねばならない。

岩崎武雄著現代英米の倫理学、一九六三年、二二九頁

感覚的に検証不能でも、成り立つ命題があることを、われわれは知って置かねばならない。といって「国民が承知しない」とか「…を人類は希望している」といった表現が文字通りの意味をもつとは考えられない。おそらく、これ

社会科学の論争における非合理的要素について

は「私は承知しない」「私は希望する」ということの詩的表現に過ぎないであろう。では、なぜこのような詩的表現が使用されるのであろうか。それは、相手の態度を変化させようとするからである。

○

私は、さきに論争とは、「意見の不一致」にはじまり「相手が態度を変える」ことを目的としたものであり、「意見の不一致」を分析すれば「確信の不一致」と「態度の不一致」になることを指摘した。前述した如く自然科学の場合など、確信が一致すれば、「態度の不一致」は解消する。これに幻惑され、従来「態度の不一致」は、とかく等閑に附されていた。これを強調したことはステイブソン功績と言つてよからう。

妻が飲酒家の夫に「酒は胃に悪い」と言い、夫も、その事実を承認しても、夫は態度をあらため飲酒を断念するとはかぎらない。そこで、妻が「肝臓にも心臓にも悪い」「浪費である」「信用をなくする」など種々の事実指摘し夫が「その通りだ」とその全部を承認しても、なお飲酒をやめないかも知れない。親が子供に対してなす御説教など、このような例は極めて多い。事実を承認し、確信の上で一致しても、態度が変化し、態度の不一致が解消されるとは限らない。このように考えると「確信の不一致」と「態度の不一致」が別個のものであることが明らかになる。それどころか、確信が一致すればするほど態度はますます不一致になることすらある。

ここに完全な家賃統制法案があるとしよう。その条項を詳細に知れば知るほど借家人はこの法案に賛意を表し、家主達は、ますますこれに反対するだろう。自民党が減税、所得倍増など一連の政策をかけた、多くの人がその実現を確信したとしても、それらの人が皆自民党に投票するか否かは、わからない。以上のごとく「確信の不一致」と「態



度の不一致」とは別個のものである。

では「態度の不一致」とは何か。これは欲求、趣好、希望、目的の不一致と見てよからう。多分に情緒的、心理的な要素を含んでいる態度、非合理的な感情を合理的手段で動かせるものではない。これを動かすかめには、何か力動的な方法を用いなければならない。この方法たるや、いきおい非合理的なものにならざるをえない。幼児や野蠻人は、この方法として暴力を用いるだろう。現代の社会、とくに科学的論争で暴力を用いるわけにはゆかない。そこで、もっぱら言語、文章による説得方法もちいる。心理的影響を及ぼすと思われる情緒的、詩的表現を用い、声に強弱をつける。知的直覚論者は「自明な真理」知的民主主義者は「社会的通念」「世論」、知的貴族主義者は知的「權威者」のことばを引用し、相手に心理的動揺を与え、相手の態度を自分に有利なるよう変化させようと試みる。場合によっては、「それ善人をも往生す、まして悪人おや」(親鸞)、「貧しきものは幸なるかな」(イエス)などのようなパラドックスを用いて大きな成功することもある

註一 この場合、暴力と言論とはその本質において少しも変りはない。ソローキン、ランデン著、高橋正己訳「権力と道德」十一頁

(二) この際、注心意すべきことは、引用された言葉は、論者の論旨と心理的關係はあるが、論理的關係はないということである。たとえば、引用文自体は合理的であり、検証できるものであっても、引用文として用いられている場合は、論理的役割を課せられているのではない。学界、学派において、權威に盲目的に柔順であることは、一見学的態度に見えるが、実は反合理的、非科学的事大主義にすぎない。

註一 Reichenbaech: The Rise of Scientific Philosophy, 9 p.

さらに「悲惨なる」戦争、「搾取あくなき」資本主義といった形容詞が、文脈をはなれて用いられていることがしばしばある。これらの形容詞は論理的に見れば、一種の枕ことばで、意味はないが、情緒的には大いに役立っていると考えられる。

一見、合理的記述をもって終始していると考えられる社会科学の論文においても、些細にこれを検討すると、かかる非合理的説得方法が意外に多く用いられている。

最後に、ことばについて考えてみよう。およそ言葉は、われわれが事物、自分の意志、感情を伝達、報告する社会的手段であるとして大過はあるまい。ところが、その内容がえてして「あいまい」であり、またその機能が思い違いされている場合が多い。これでは科学はやって行けない。かつてニュートンは数を整理し、これが根幹となって近代科学は偉大は進歩をした。これと同様、言葉を整理して科学に貢献しようとするが分析哲学の立場である。

ウィットゲンシュタイン等論理実証主義の人達は、「もし、われわれが使っていることばの意味を正確に知っていないならば、なにごとをも建設的に議論することはできない。われわれは皆とかく、意味のない議論で時間を空費する。これは、われわれが言葉に、各人思い思いの意味をもたせて使い、相手が、これと同じ意味でその言葉を使っている、と思ひこんでいるからである」という主旨のことを言う。そこで、言葉の定義が必要となる。この定義はもちろん辞書的なものではありえない。なぜならば、辞書は単に同語反覆的な意味を示しているにすぎない。これは「意味論の意味」でなければならないという。たとえば「善」とは「よいこと」と言った定義は同語反覆にすぎない。「善」とは最大多数の最大幸福」とか「感情の満足」「神律にかなった行動」といえば、一応これは意味論的定義となる。

だがムーア教授によれば、「善」は定義することができない。なぜならば、「善」は単純概念、すなわち分析可能な概念であるという。「緑」は、これを分析し「青色と黄色の混合色」と定義できるが、黄色は原色だから黄色は黄色であると言うよりほかはない。考えてみれば、定義を下しても、定義中の用語を、また定義しなければならなくなる。かくて無限背進となり、最後は単純概念にぶつかり、結局定義は不可能となる。

ウィットゲンシュタインの提案は、まことにはつきりして勇ましく、その影響は大きい。しかし、これは前述の如く、論理的に見て、実行不可能といわざるをえない。

たしかに用語は多くの意味を含み、その意味は「あいまい」である。だが定義をしてみても維然「あいまいさ」は残る。しかし、ひるがえって考えて見れば、われわれは日常の生活で、かなり言葉の用法には熟達している。「あいまい」な言葉を用いながらも、さほど不便には遭遇しない。用語にあまり重点を置くからこそ、「白馬非馬論」のような詭弁となるのである。そこでカール・ポッパーの提案する如く、用語に負担をかけることなく、用語を派生的意味やニュアンスにおいて使うことを、注意深く慎しめば、たとえ、それが「あいまい」多義であっても、使用して大きな間違はあるまい。

註一 Edward Moore: *Principia Ethica*

註二 カール・ポッパー著、竹田弘道訳「自由社会の哲学とその論敵」1963 大阪泉屋参照

○社会科学は科学であり、それは合理的で、非合理的なことは、ことごとく排除しなければならないと言う考え方は、今日では、ほとんど社会通念になっているのであるまいか。だが、この様な考え方は、たかだかツェノンの詭弁

の如きものを生み出すだけであろう。

およそ人間は歴史的所産である。その本質を「理性」と割切るのは近世哲学の臆断である。本質を理性と見るからこそ、抽象的論理で万事を解決しようとする。思惟の方法であるはずの論理が、飛躍して、実体構成の原理と見られてしまう。かく論理を拡大使用することによって論争は現実から遊離する。戦後「主体性論」その他、がずかずの社会科学上の論争の主潮は、今にして見れば、歴史の流れとは、ほとんど反対の方向に向っていた。対象と思惟に含まれる非合理的要素に着眼することにより、論争を現実から遊離させず、再び建設的な実り多きものにする必要が切実に感じられる。

註一 ラインホルト・ニーバ著、オーティスケリー訳「自我と歴史の対話」あとがき、自伝参照、1963 未来社

Elie Halévy: The Growth of Philosophic Radicalism, 1960 (Beacon Press)